ま　え　が　き

災害は忘れたころにやってくるといわれているが，地震などに比べたら火災は日常茶飯事である．日本における建物火災の発生は年間にすれば３万件を越え，火災原因の３割くらいが放火だと推定され，死者２千人くらいの内の半分近くが自殺だとのことである．多くの火事が小火（ぼや）で消し止められているのは，十分前後で駆けつける消防と建物内外の不燃化のたまものである．

普段のときはこれでよいのかも知れないが，地震の時はそうはいかない．阪神淡路の大震災のとき，倒壊建物で道路はふさがれ，水道管は寸断され，地震に耐えた建物に巡りくる炎を無念にも眺めるしかなかった話を聞く．柱や壁がむき出しになって累々と折り重なり続く木造家屋の木端（こっぱ）の並びに火が回らず，大火に至らなかったのは，風が少なかったためと思われる．全く，不幸中の幸いであった．地震時には消防に過大な期待をすべきではなく，火除け地や小川・池はやはり必要なのである．

また，言おう．建物の高層化である．30 階建てや 40 階建てはめずらしくなくなってきている．一つの建物には万を超す人が入っている．木造家屋が主であった日本の町は，都市大火を繰り返してきたが，２階建てか３階建てであり，路地であったとしてもたくさんあったであろうから，多くは何とか逃げのびることができたかと思う．しかし，超高層建物の場合は避難の階段は２本であり，煙の漏れ入る可能性や階段室が高温になる恐れもある．数少ない避難経路を安全に確保することは論を待たない．さらに，上階への延焼を何としても防がなければならないが，建物として窓は必要である．窓際からの上階延焼はすでに日本でも起きている．超高層建物がまるごと燃える火災も外国では起きているが，対岸の火事であり，他山の石とはなっていない．幸いというべきか，不幸というべきか，超高層建物の本格的火災が日本ではまだ発生していないので，経験に裏打ちされた防火対策が未だ確立されていない．

建築教育の立場から火災を見ると，大局的には火と人間のかかわりや都市大火の歴史的把握が必要であり，局部的には燃焼・熱気流・伝熱・熱膨張などに触れざるをえず，とうてい一個人でまかなうことは不可能である．

そこで本書では，いくつかの専門分野にわたることをわかりやすく記すため，また，専門用語や数式はなるべく避けるため，各ページ左側に専用欄を設け，図や写真を多用した．

最も重視したことは，専門の異なる分野からの念入りな相互査読である．まず，専門用語を避けた目次を章のみならず節にいたるまで作成し，朱を入れることを前提にして執筆依頼を行った．各章の査読代表は，専門が異なる編集者に担当してもらい，学生に成り代わって物言いをつける緊張した作業を行った．執筆者の心労はさらに深かったかと拝察する．

本書を世におくることができたのは，執筆・編集陣の献身的な努力のみならず，火災科学を先導した在天・在世の先達の導きによる．最後に，陽に陰に本書作成を支え，完成を見ずに逝かられた斉藤英明氏，ならびに後を引き継がれた横田穂波氏の共立出版の両編集者に深く御礼申し上げる．

2007 年 11 月

㈳日本火災学会刊行委員会
防火教材小委員会　主査　　上杉　英樹